

# 自分の気持ちと家族が第一

大手上場企業の社長交代と中小同族企業の事業承継には大きな違いが2つあります。

1つは中小企業の場合には会社が事業主体であるだけでなく、経営者一族にとつて民法上・相続税法上の財産であるという点。もう1つは経営的な課題や所有財産の移転等の法的問題だけではなく、経営者自身の人生観や考え方、人生設計、家族の感情などが深くか

わつてくることです。

ですから様々な利害が絡む一族を巻き込んだ厄介なトラブルに発展するケースも少なくありません。そのため相談者にはまず「ご自分の気持ちや人生、家族のことを後回しにせず、そこからスタートして下さい」とアドバイスします。

「事業承継という大きな仕事を成し遂げようとする時、トップが個人的な感情や要望を前面に出してはいけな

い」という考え方は正しくないと思います。

る必要がありません。

日常の業務では1〜2時間の相談の中で混沌としている事業承継課題を少しでも引き出し、方向性を発見してもらうよう

## 「俺の代で潰せない」

北見信用金庫さんなどの協力により去年1年間で個別相談に応じた会社のデータを分析したところ、とても興味深いことがわかりました。それは

創業者より2代目、3代目の方が事業承継に向けて早めに行動する傾向が見られることです。

会社を継いだ経験があるから「後の世代に事業を引き継ぐことが社長の使命」という思いがどこにあるのでしょうか。

一方、創業者にとつて事業承継は生まれて初めての経験。とまどいや不安がアクションを起こす時期を遅らせているので

しょう。

以前の中小企業基盤整備

機構の事業承継シンポジウムで「北の錦」で知られる栗山の小林酒造(株)の社長とお会いしました。

47歳の若さですが、経営者になった瞬間から「創業100数年のこの会社を自分の代でつぶしてはならない。最低でも業績を落とさず、1つでも功績をあげよう」と心に決めたそうです。ト

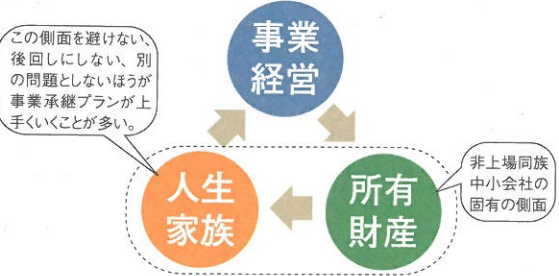
に心がけています。ですから、社長の本心を引き出すために早い段階でかなり失礼な質問をすることもあります。

経営者の本音が1つでも2つでも聞けた時、ようやく本人が納得できる事業承継プランと課題が見えてきます。

トップとしての使命感と会社の歴史の中に自分の存在を残したいという思いが切ないほど伝わってきました。

連載第2回で紹介した、大手企業を退職して家業を継ごうとしている後継者も親から「後を継げ」と言われたわけではありません。多感な中学時代に父が2代目となつた瞬間を見た彼にとつて、祖父の代から築いてきた会社を継ぐのはごく自然な流れなのでしょう。

小林酒造の社長も中学生の息子の作文に「僕が将来、社長になったら……」という一文があったと語っていました。



中小同族会社の事業承継の特徴

# 「上手いく 事業承継のコツと 陥りやすい誤解」

連載第5回

中小企業基盤整備機構  
北海道支部 事業承継コーディネータ

吉川 孝

### ◆お知らせ◆

中小企業基盤整備機構北海道支部では、事業承継コーディネータによる事業承継の無料相談を行っています。事前予約のうえお越し下さい。

■場所 札幌市中央区北2条西1丁目1-7 OREビル6階

■日時 毎週水曜日の午後1時～午後5時

■予約 連絡先(経営支援課)  
☎011-210-7471・FAX011-210-7481  
E-Mail hokkaido5@smrj.go.jp